

競争心概念の再検討

— 競争心の測定に関するレビュー —

太田 伸 幸¹⁾

【はじめに】

教育の世界に限らず、競争は人間社会にありふれている(久富, 1993)。経済, 科学技術, スポーツ, 芸術など、競争の範囲は多岐にわたる。さらに、心理学研究の枠にとどまらず、一般社会においても“競争に勝つ”ことがとかく注目を集めている。これは、Deutsch (1949a) が「同一の目標に向かって努力する人々の中で目標を達成するのがただ一人である場合」を競争状況であると定義しているように、競争が目標を媒介とした対人関係であると考えられているからである。目標を達成できる人が限られる以上、注目を集めるのは当然のことであろう。

中村 (1983) は、対人関係を目標性, 結合性, 分化性の3次元でとらえた。この3次元のうち、競争-協同を目標性の次元として表わしており、競争と協同は目標に関した対人関係となっている。しかし、競争や協同は直接的な対人的相互作用を持つ場合ばかりではない。南 (1957) は、競争の種類を競争者どうしに相互作用がある直接的競争と、同じ大学を受験する見知らぬ受験生どうしなどといった、競争相手との直接的な相互作用がない間接的競争とに分類した。さらに直接的競争を個人間競争と集団間競争とに分類しているが、競争場面の効果や競争における対人関係を扱う場合、個人間競争が取り扱われることが多い。これは間接的競争では、対人的態度の対象が特定できないことや、集団間競争では、集団内では協同関係になることが関係している。

中村 (1983) の対人関係の次元や Deutsch (1949a) の競争の定義にあるように、競争研究は目標達成を前提とした関係を想定している。このとき「競争に勝つ」ことが被験者に教示として与えられ、パズル課題 (Anderson & Morrow, 1995; Bruning, Sommer, & Jones, 1966; Deutsch, 1960; Reeve & Deci, 1996;

Reeve, Olson, & Cole, 1987; Vallerand, Gauvin, & Hallwell, 1986a, 1986b) や囚人のジレンマゲーム (e.g. Insko, Schopler, Gaertner, Wildschut, Kozar, Pinter, Finkel, Brazil, Cecil, & Montoya, 2001; MaCallum, Harring, Gilmore, Drenan, Insko, & Thibaut, 1985) を用いた実験室実験によるアプローチが主に行なわれている。そしてこうした競争状況における競争の影響の知見では、対人感情は敵対的であること (Deutsch, 1949b; Sherif, 1966) や、相手や課題に対する攻撃性が高まること (Anderson & Morrow, 1995; Nelson, Gelfand, & Harimamm, 1969) が指摘されており、競争に対して否定的な考察がなされている場合が多い。

【競争のプロセス】

Martens (1977) は、競争のプロセスを客観的競争状況 (Objective competitive situation; OCS), 主観的競争状況 (Subjective competitive situation; SCS), 反応 (Response), 影響 (Consequences) の4つの過程を用いてモデル化した (Figure 1)。客観的競争状況とはその場面が持つ競争的な状況の程度を指し、主観的競争状況とは客観的競争状況をどれくらい競争場面であるか認識する個人差の程度を表わす。反応は競争の結果だけでなく、状態不安や攻撃的行動などの状況に付随する状態や行動まで含む。そして、影響とは反応が以後の客観的・主観的競争状況にもたらす長期的・短期的影

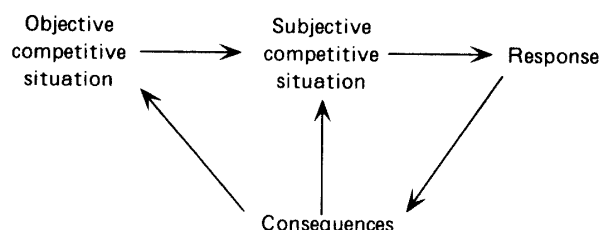


Figure 1 Martens's model of the competitive process (Martens, 1977)

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育心理学専攻博士課程 (後期課程)

響を指している。

Martens (1975) は、客観的競争状況を社会的評価の過程であるとし、過去の自身の遂行や他者の遂行、一般的な基準との比較が求められる状況であるとした。そして、主観的競争状況を自身がそうした比較を行なうことに動機づけられる程度とした。また、Scanlan (1988) も Martens (1977) のモデルを社会的評価と社会的比較の観点でとらえている。このように競争に至るプロセスについては、目標達成に基づく議論だけでなく、他者との社会的比較から説明されることも多い (太田, 1999; 高田, 1992)。

【本稿の目的】

実験研究では、Martens (1977) のモデルを用いると、〈客観的競争状況→結果→影響〉の流れで検討しており、主観的競争状況については測定していない。これは主観的競争状況が認知変数であるため、測定が困難であることによる (Scanlan, 1988)。個人が、実験場面で設定される競争場面を競争状況として受け止めているかどうかについては操作チェックとして簡単に触れられる程度である場合が多い。しかし、状況が競争的でも競争場面であるという認識が低ければ個人の認識の中では競争ととらえられ難いし、状況があまり競争的でなくても競争的な志向が高ければ競争と認識されやすい。競争場面の認識のしやすさや競争の志向のしやすさの個人差は、競争心の高さに由来するものではないだろうか。

実験場面を用いた競争研究では個人の特性、特に競争に関する特性を説明変数とした検討は少ないため (e.g. Houston, Kinnie, Lupo, Terry, & Ho, 2000), 主観的競争状況を認識させやすくする要因について検討する必要があると考えられる。したがって、本稿ではこの要因として考えられる競争心について、その概念の検討を

行なうことを目的とする。

【競争心の定義】

競争心については、その必要性にもかかわらず、必ずしも明確な定義はない (古畑, 2000) ため、研究者ごとにその定義はやや異なっている (Table 1 参照)。古畑は競争心を大きく 2 つに分けている。ひとつは、自分が限定された目標 (領域) に入ろうと努めるものであり、これは個人主義的動機志向に基づいている。もうひとつは自分だけが目標 (領域) に入ろうと努め、相手が入ろうとするのを阻もうと努めるものであり、これが競争的動機志向に基づく競争心である。競争において目標を達成したいという部分においては、どの定義もおおむね一致しているが、その目標が、絶対的目標なのか、他者との相対的な目標であるかについては定義によって異なっているといえる。それは、競争心が取り扱われる文脈とも関連しているであろう。しかし、相手と競うことが定義に含まれている場合が多いため、競争的動機志向に基づく競争心としてまとめることが出来るであろう。したがって、研究ごとに競争心のとらえ方は異なっているが、本稿において一般的な競争心と記述する場合は、古畑 (2000) の定義に倣い、「個人が、目標達成に関して、相手 (他の個人ないしは集団) と競い合って相手に優越し、凌駕し、勝利を収めようとする欲求」を意味するものとする。

競争心は達成動機研究 (堀野・森, 1991; McClelland, Atkinson, Clark, & Lowell, 1953) やスポーツ心理学研究 (Gill, 1992; Martens, 1976) など様々な分野で定義されていることからわかるように、競争心は主に、達成動機研究、スポーツ心理学、実験社会心理学、パーソナリティ心理学の 4 つの基礎的心理学分野で検討されている (Smither & Houston, 1992)。特にスポー

Table 1 競争心の定義

筆 者	年	定 義
McClelland, Atkinson, Clark, & Lowell	1953	いろいろな状況において人より勝っていたいという欲求としての普遍的な達成動機づけ
Martens ²⁾	1976	スポーツにおいて評価を行なう他者の中で優秀な基準と比較されるときに成功のために戦おうとする性質
堀野・森	1991	他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることを目指す達成動機
Gill	1992	競争的なスポーツにおける達成志向性、もしくはスポーツに特殊な達成志向性の形態
Smither & Houston	1992	対人相互作用場面において勝ちたいと思う欲望
古畑	2000	個人が、目標達成に関して、相手 (他の個人ないしは集団) と競い合って相手に優越し、凌駕し、勝利を収めようとする欲求

2) この文献については入手できないため、Finkenbergh, Moode, & Dinucci (1998) より引用した。

資 料

Table 2 競争に関する尺度

筆 者	年	尺 度 名	備 考
1. 他の特性と同時に測定する尺度			
Spence & Helmreich	1978	Work and Family Orientation	下位尺度に competitiveness scale
Jenkins	1978	Jenkins Activity Survey (JAS)	下位尺度に競争心を測定する尺度
Matthews	1980	Measurement of type A behavior in children (MYTH)	下位尺度に競争心を測定する尺度
Owens & Straton	1980	Co-operative, Competitive, and Individualised Learning Preference Scale for Students (LPSS)	学習場面での学習志向性
東江・石川・嘉数	1984	協同・競争・個別学習選好尺度	LPSS の日本語版
山崎・菊野	1990	日本語版幼児用 Type A 検査 (MYTH)	MYTH の日本語版
谷島・新井	1995	学習目標志向尺度	学習場面での目標志向性を測定
2. 競争心のみを測定する尺度			
Martin & Larsen	1976	Competitive-Cooperative Attitude Scale	an aggressive orientation, fascist tendencies, a work ethic orientation, a power orientation, an independence
Buss	1986	Competitiveness Scale	多面的な競争心を測定する尺度
室山・弓削	1990	競争心尺度	弓削・室山(1990)の各下位尺度に項目を追加した改訂版
Ryckman, Hammer, Kaczor, & Gold	1990	Hypercompetitive Attitude Scale(HCAS)	過剰な競争心を測定する尺度
弓削・室山	1990	競争心尺度	Buss(1986)の尺度の邦訳。勝負志向、負けず嫌い、競争に対する態度の3因子
Smither & Houston	1992	Competitiveness Index (CI)	emotion, argument, gamesの3因子
Ryckman, Hammer, Kaczor, & Gold	1996	Personal Development Competitive Attitude Scale (PDCAS)	競争が自身の成長に有効であるかどうかの信念を測定
関口	1996	競争心尺度	児童の学習場面における競争心を測定。負けたくない、目立ちたい、試したいの3因子
関口	1998	一般的競争心尺度	負けたくない、目立ちたい、試したいの3因子
Lasane, Howard, Czopp, Sweigard, Bennett, & Carvajal	1999	Index of Masculinity	男性性を測定する尺度。下位尺度は mastery competitiveness, antisocial competitiveness
3. スポーツ場面で用いられる尺度			
Lakie	1964	Win-at-any-Cost Sports Competition Scale	スポーツに関する競争心を測定
Martens & Simon	1976	Sport Competition Anxiety Test (SCAT)	競争状況に対する不安傾向を測定
Martens & Gill			
Fabian & Ross	1984	Sports Competition Trait Inventory (SCTI)	競争を志向する意識を測定
Vealey	1986	Competitive Orientation Inventory(COI)	成績志向(performance orientation)と結果志向(outcome orientation)のどちらが有意であるかを測定
	1988		
Gill & Deeter	1988	Sport Orientation Questionnaire (SOQ)	competitiveness, win, goalの3因子

心理学、パーソナリティ心理学の分野では競争心を測定するための尺度が多く開発されている (Table 2 参照)。

パーソナリティ測定における競争心へのアプローチ法としては、特性としての競争心、競争に対する態度、達成動機概念に含まれる競争、競争的な目標志向性などの測定が考えられる。一般的な競争心尺度研究の特徴として、構成概念妥当性確認のため、他の性格特性との比較が多く行なわれていることがあげられる。また、多面的なパーソナリティ特性を測定する尺度や目標志向性尺度の下位尺度として競争心 (Matthews, 1980 ; Spence & Helmreich, 1978 ; 山崎・菊野, 1990) や競争的な

目標 (東江・石川・嘉数, 1984 ; Owens & Straton, 1980 ; 谷島・新井, 1995) を測定する尺度が開発されている。

スポーツ心理学の分野で競争心が扱われるのは、スポーツ活動の特殊性が関連していると考えられる。それは、スポーツ活動が教育場面とは違い、競争状況を是認する要素が強い、すなわちスポーツ活動自体が競争的要素を含む場面が多いことがあげられる。そのため、スポーツ心理学では競争的な活動とそうでない活動における行動の差を見ようとすることが多い (Gill, 1993)。競争的でない活動には非競争的スポーツと非スポーツ活動とが

あり、実験社会心理学研究の分野だと個人的志向、協同との比較となることとは異なっている。

したがって本稿では、個人の特性としての競争心について、パーソナリティ心理学、スポーツ心理学の研究における競争心の測定を中心にその概念について検討していく。

【パーソナリティ心理学で取り扱われる競争心】

1. 多面的なパーソナリティを測定する尺度

多面的なパーソナリティ特性を測定する尺度の下位尺度として含まれる競争心尺度には、Spence & Helmreich (1978) が開発した WOFO (Work and Family Orientation Questionnaire) がある。WOFO は仕事における業績とパーソナリティ特性を比較する研究で開発され、他の下位尺度には、「習得 (mastery)」、「仕事 (work)」、「無関心 (personal unconcern)」があり、競争心は「習得」、「仕事」と中程度の相関を示している。

他にも、競争心がタイプ A 行動特性に含まれていることから、タイプ A 特性を測定する尺度においても競争心を測定する下位尺度が存在している。Jenkins (1978) が大人のタイプ A 行動について測定する目的で開発した JAS (Jenkins Activity Survey) には、下位尺度の一つに競争心を測定する尺度が含まれている。この尺度は主に、タイプ A 群とタイプ B 群との特性の差を測定する目的で使用されている (Johnsen, Espnes, & Gillard, 1998; Matthews, Krantz, Dembroski, & MacDougall, 1982)。また、子どものタイプ A 行動を測定する尺度として Matthews (1980) が開発した MYTH (Measurement of type A behavior in children) にも競争心を測定する下位尺度が存在する。この MYTH は山崎・菊野 (1990) により日本語版が作成されており、タイプ A 群とタイプ B 群での比較が行なわれている (山崎, 1989; 山崎・菊野, 1990)。このようにタイプ A 行動には競争的な要素が含まれていることから、タイプ A 行動尺度は競争心尺度妥当性検討のための外的基準として用いられることも多い (e.g. 関口, 1999)。

2. 一般的な競争心のみを測定する尺度

一般的な競争心を測定する尺度として、Martin & Larsen (1976) は競争的-協同的態度尺度 (Competitive-Cooperative Attitude Scale) を開発した。これは競争的あるいは協同的と考えられる行動を示して、どれくらい当てはまるかを回答する尺度である。因子分析

により 5 因子 (攻撃的志向, ファシスト傾向, 労働鑑志向, 勢力志向, 独立志向) が抽出され、このうち「攻撃的志向」、「ファシスト傾向」、「勢力志向」が競争的な態度であるとされた。相手に対する優越や攻撃性が強調されているため、Ryckman, Hammer, Kaczor, & Gold (1990) はこの尺度を過剰な競争心を測定する尺度であるとした。

これらの研究に対し、Buss (1986) は、競争心の高い人の特徴として、「競争的状况を好む」、「そうした状況を求める」、「競争がないとつまらないと感じる」、「とても勝ち目がない相手にも挑戦する」、「勝つためには何でもする (ルールを曲げることを含めて)」、「競争では熱くなり負けると感情的になる」、「競争心のない人は理解できない」をあげた。そして、それまでの競争心尺度が明確に競争心のみを測定していないとし、独自に競争心尺度を作成した。弓削・室山 (1990) はこの尺度を邦訳し、因子分析を行ない 3 因子 (勝負志向, 負けず嫌い, 競争に対する態度) を抽出した。「勝負志向」とは、競争場面を好み、競争やゲームでも勝ち負けのはっきりしている点を志向している傾向を表わし、「負けず嫌い」は、競争場面において勝つことに価値を見出す傾向を表わしている。そして「競争に対する態度」は競争の結果に対する自分の受け止め方を表わしている。室山・弓削 (1990) は、この尺度にさらに項目を加えて検討し、「勝負志向」と「負けず嫌い」は正の相関が認められるが、「競争に対する態度」と他の 2 因子には有意な相関が認められないことを示した。したがって、「競争に対する態度」因子は一般的な競争心の定義にそった概念ではなく、別の側面を測定していることが考えられる。

Smither & Houston (1992) も、競争心の定義を明確にするため、競争心目録 (Competitiveness Index; CI) を作成し、競争の下位側面として「情動 (emotion)」、「主張 (argument)」、「ゲーム (games)」を指摘した。「情動」は競争を好むかどうかの感情、「主張」は自分の意見を押し通す程度、「ゲーム」は競争的要素をもつゲームを好むかどうかを測定している。そして Smither & Houston は、競争心は達成動機の一側面であるが、必ずしも達成動機に競争心が必要となるわけではないとしている。確かに、達成動機研究 (堀野, 1987; 堀野・森, 1991) は、競争的達成動機以外に自己充實的達成動機が認められており、自己充實的達成動機は競争的達成動機と弱い正の相関しか持たないことが確認されている (堀野・森, 1991)。

また、関口 (1996) は、児童の学習場面における競争心を測定する尺度を開発し、つづいて一般的競争心尺度を作成した (関口, 1998)。どちらの尺度も競争心の強

い人の長をあげ、自身に当てはまる程度の回答を求めている。いずれの尺度においても同様の3因子構造（負けたくない、目立ちたい、試したい）が抽出されており、一般的な競争心の定義に当てはまるのは、「負けたくない」因子のみである。しかし、尺度全体としての内的整合性はある程度有しており（ $\alpha = .74 \sim .79$ ）、比較的まとまった概念を測定している。また、Type A 得点と高い正の相関が認められており（関口, 1999）、一般的な競争心の定義に近い競争心を測定していると考えられる。Lasane, Howard, Czopp, Sweigard, Bennett, & Carvajal (1999) は男性性を測定する尺度として男性性指標（Index of Masculinity）を作成した。下位尺度には「習得競争心（mastery competitiveness）」と「反社会的競争心（antisocial competitiveness）」であり、どちらも異なった側面を測定する競争心の尺度となっている。“他者に勝つ”ことを重視するのは「反社会的競争心」であり、「習得競争心」では、良い成績を取ることを重視している。これらの尺度では、“勝つ”こと以外を目的とする因子が抽出されており、競争心の概念の広がりが見られる。

3. 競争の特定の側面を測定する尺度

Buss 以降の競争心を測定する尺度では複数の因子が抽出されており、競争心を多面的にとらえようとする試みがなされているといえよう。しかし、また一方で競争の特定の側面のみに注目し、競争心をとらえる試みもなされている。

Ryckman et al. (1990) の過競争尺度（Hypercompetitive Attitude Scale; HCAS）は、競争的—協同的態度尺度で測定されるような過剰な競争心の測定を目的として開発されている。競争的—協同的態度尺度（Ryckman et al., 1990）やマキャベリズム尺度（Ryckman, Thornton, & Butler, 1994）とも高い相関が認められており、HCAS は相手より優ること、相手に勝つことを特に重視する態度を測定しているといえる。

また、Ryckman & Hamel (1992) は、個人主義的動機志向に基づく競争目標として、自己成長のための競争目標の存在を明らかにした。この競争目標に注目し競争心をとらえようとしたのが Ryckman, Hammer, Kaczor, & Gold (1996) である。Ryckman et al. は、競争が自身の成長に有効であるかどうかの信念を測定するために自己成長的競争態度尺度（Personal Development Competitive Attitude scale; PDCAS）を開発した。それまでの競争心を測定する尺度では、他者に優る意識を測定していたが、PDCAS では、他者に優

ることよりも、競争が対人関係の向上や自身の技術や努力を伸ばす影響力についての信念を測定している。一般的な競争心の定義にあるように、競争的な目標達成が前提となるわけではないので、厳密には PDCAS は競争心を測定しているとはいえないかもしれない。しかし、競争心を別の側面からとらえ直す契機の役割を果たしていることは重視すべきであろう。太田 (2000, 2001a) は PDCAS の一部を邦訳し、競争肯定観尺度として用いた。そして、学習においてライバルが存在する生徒は、ライバルが存在しない生徒よりも競争心だけでなく競争肯定観も高いことを示している。Ryckman et al. (1996) や Ryckman, Libby, van den Borne, Gold, & Linder (1997) は PDCAS と HCAS との相関を求めたが、どちらにおいてもほぼ無相関を示しており、この2つの側面は独立であると考えられる。

4. パーソナリティ心理学分野での競争心測定のまとめ

実験場面とは異なり、競争のとらえ方も一様ではなく、したがってさまざまなタイプの尺度が考案されてきた。実験研究での競争場面では PDCAS で表わされるような競争心の測定は不可能であろう。例えば、競争は内発的動機づけを低下させる（Deci, Betley, Kahle, Abrams, & Porac, 1981; Valleraud et al., 1986a, 1986b）ことが指摘されているが、これは競争状況が外的に被験者の行動を統制する場合の効果である。競争心は内的動機や外生的動機と相関が高く（関口, 1997）、個人の競争心を反映した知見とはいえない。さらに「競争に勝つ」ことが強制される場合とされない場合で競争に勝ったときの内発的動機づけの高さを比較すると、強制されない場合の方が有意に内発的動機づけは高まることが明らかにされている（Reeve & Deci, 1996）。

また、Houston et al. (1992) は、被験者を競争心の高さにより群分けし、競争的行動の生起頻度を測定したところ、競争心の高い被験者の方が競争行動をとりやすいことが示された。すなわち、被験者の個人差を考慮しないで、被験者に競争を強制する研究では、PDCAS で測定される「競争を利用する」動機や内的動機に基づく自発的な競争についての検討は難しいことが推測される。

【スポーツ心理学で取り扱われる競争心】

1. 競争に関する特性の測定

スポーツ場面では競争の存在は自然であるので、スポーツ活動に限定した競争に関する特性を測定する尺度が多く開発されている。Lakie (1964) はスポーツ場面で勝

つために取る行動を承認するか否かで競争心を測定する競争的態度尺度 (Win-at-any-Cost Sports Competition Scale) を開発した。Lakie は“競争に勝つ”という目標を持つことが競争心であるととらえている。しかし競争的なスポーツ活動に参加する動機づけの測定においては Lakie の述べるような“競争に勝つ”ことを直接的に志向する因子は存在せず、達成 (achievement) に関する因子が存在するのみであった (Fung, 1992; Gould, Feltz, & Weiss, 1985)。

Martens & Gill (1976), Martens & Simon (1976) は、こうした競争状況に対する不安傾向を測定する尺度としてスポーツ競争不安検査 (Sport Competition Anxiety Test; SCAT) を開発した。これはスポーツ活動における競争場面に限定した尺度であり、競争場面に限定した測定においては一般の不安傾向尺度よりも有効な尺度として機能する (Gill & Deeter, 1988)。また、Fabian & Ross (1984) は SCAT などを参考に、スポーツにおける競争心を測定する尺度としてスポーツ競争特性目録 (Sports Competition Trait Inventory; SCTI) を作成した。SCTI は Lakie (1964) の競争的態度尺度と異なり、競争に勝つことよりも競争をしようとすることを測定している。すなわち、明確な目標 (競争に勝つこと) についての行動ではなく、スポーツ活動における競争行動をどれくらい志向するのかについての尺度であると考えられる。Lakie と Fabian & Ross の競争心のとらえ方は異なっているが、これは競争の目標性を尺度に取り込んでいるか否かの相違であろう。

競争における目標性について Vealey (1986, 1988) は、「成績志向 (performance orientation)」と「結果志向 (outcome orientation)」のどちらが有意であるかを測定する尺度として競争志向目録 (Competitive Orientation Inventory; COI) を開発した。「成績志向」とは競争場面において勝敗よりも記録の方を重視する志向であり、反対に「結果志向」とは記録よりも勝敗にこだわる志向である。COI では、競争における成績 (“very good”, “above average”, “below average”, “very poor”) と競争結果 (“easy win”, “close win”, “close loss”, “big loss”) の組み合わせでできる16の状況に対する満足度を測定している (Appendix A 参照)。「成績志向」と「結果志向」は尺度得点の算出方法の関係上、高い負の相関を示しており、COI ではこれら2つの志向性は競争の目標性を考える上で、対極にある概念としてとらえることが可能であろう。このうち Lakie (1964) の示す競争心に近いのは「結果志向」のみであり、Vealey は競争の目標性を「成績志向」まで広げたことになる。

2. 多面的な競争心の測定

Gill & Deeter (1988) は、スポーツ心理学研究において、競争心、達成動機、達成行動が研究テーマとなっても、それらを測定する尺度が存在しないとして、スポーツ志向性質問紙 (Sport Orientation Questionnaire; SOQ) を作成した。SOQ は「競争心志向 (competitiveness orientation)」、「勝利志向 (win orientation)」、「自己目標志向 (goal orientation)³⁾」の3つの下位尺度より構成される。このうち Lakie (1964) の尺度と対応するのは「勝利志向」であり、競争心志向とは異なっている。Gill & Deeterの競争心志向は競争を行なうことや競争を楽しむことを概念として含んでおり、競争に勝つことよりも競争状況に入ることを志向する尺度となっている。すなわち、Gill & Deeterでは競争に勝つことを競争心ととらえているわけではないと考えられる。

また、下位尺度間相関を見ると、「自己目標志向」と他の2つの志向間には弱い負の相関が認められる。この「自己目標志向」は自分の目標を達成することを重視するので COI の「成績志向」と概念的に近いのではないかと考えられる。そして、「競争心志向」と「勝利志向」には強い正の相関が認められ、どちらも一般的な競争心と関連しているといえよう。しかし、「競争心志向」は勝つことを志向しているわけではないので、競争的態度尺度とは「勝利志向」が、SCTI とは「競争心志向」が、それぞれ内容的に同じ志向を測定していると考えられる。SOQ と COI の比較 (Gill, Kelley, Martin, & Caruso, 1991) においては、SOQ はスポーツの目標志向性を多面的に測定する尺度とされ、COI は相対的な競争における遂行志向性を測定するのに適した尺度であるとされている。SOQ はスポーツの目標志向性を測定する尺度であるとはいえ、他の競争心尺度で測定しようとしている競争心の側面の要素も併せ持っているといえるのではないだろうか。そのため、スポーツ心理学研究では SOQ を測定尺度として用いる研究が多く行なわれている (Finkenber, Moode, & Dinucci, 1998; Gill, 1988; Gill, Dzewaltowski, & Deeter, 1988; Houston, Carter, & Smitther, 1997; Huddleston & Garvin, 1995; Kelley, Hoffman, & Gill, 1990; Martin & Gill, 1995; Smither & Houston, 1992)。

3) 直訳すると「目標志向」であるが、広義の目標志向と紛らわしく、また個人的な目標を達成する志向を測定する尺度であるので「自己目標志向」とした。

3. スポーツ心理学分野での競争心測定のまとめ

スポーツ心理学における競争心研究の特徴として、成績を測定変数としてはあまり取り扱わないことがあげられる。その代わりに、選手としてのキャリアを基に被験者を群分けし、群間の比較を行なっている (Houston, Carter, & Smitther, 1997)。その意味でスポーツ心理学における競争心は、状態として表わされる競争心ではなく、特性として表わされる競争心に注目した検討であるといえよう。また、SOQ では勝つことと、競争することや競争を楽しむことは別の概念となっていることや、COI では成績と勝ち負けのどちらにこだわるかを測定していることなどから、勝つこと、楽しむこと、良い成績を残すことが競争における対等な価値観として存在すると推測される。すなわち競争が当たり前のよう存在するスポーツ場面では、教育場面で問題とされるような“勝つ”ことにこだわる競争心だけが全てではないというとらえ方がされていると考えられる。

4. スポーツ場面の競争心と一般的競争心の比較

パーソナリティ心理学の分野では、スポーツ場面の競争心との関連は検討されていないが、スポーツ心理学においては、特に尺度開発の過程において、一般的競争心とスポーツ場面の競争心との比較が行なわれている。

Gill & Deeter (1988) は SOQ の妥当性確認のために、WOFO の競争心下位尺度との相関を求めたところ、全因子と有意な正の相関が認められ、特に競争心志向、勝利志向と高い値を示した。Gill, Dziewaltowski, & Deeter (1988) は SOQ と WOFO を用いて判別分析を行ない、SOQ の方が競争的スポーツ群とそれ以外の群 (非競争的スポーツ群, 非スポーツ参加者群) の判別に適した尺度であることを示した。したがって、スポーツ場面に固有の競争心であっても一般的な競争心と有意な相関を持つこと、スポーツ場面の競争心をよりの確に測定する尺度であることが確認されたといえよう。

【競争心についてのまとめと今後の課題】

1. 目標型競争心と手段型競争心

競争心の測定に関してさまざまな尺度が開発されているが、概ね、何らかの目標達成に関する志向性を測定していることは共通している。しかし、目標の内容は研究ごとに相違が見られ、「他者をしのぐ (HCAS)」、「他者に勝つ (COI, SOQ)」、「自己目標を達成する (SOQ)」、「より良い成績を取る (COI)」、「自己の成長を促す (PDCAS)」、「競争をする (CI, SCTI, SOQ)」など様々である。これらの目標達成をめざす意識の高さは、達成動機からも定義されているように、個人的達成動機の強

さに関連している。この意味では競争心は前向きな達成動機として特徴付けられる。しかし、問題とされるのはこの過剰な競争心が示される場合である。過剰な競争心は望ましくない性格特性と正の相関を持つことが Lakie (1964) や Ryckman et al. (1990), Ryckman et al. (1994) など示されている。タイプ A 行動にも過剰な競争心が含まれているように、特に対人関係上で問題を引き起こす引き金となりやすい。

競争研究の文脈では、過剰な競争心の側面ばかりが強調されてきたように思われる。しかし、多面的に競争心をとらえると、他者に優りたいといった対人的な動機以外に、自己目標の達成や自身の成長といった、個人的な動機も存在している。後者の場合には、競争そのものを志向するというよりは、競争を利用すると表現する方がふさわしい。すなわち、競争は目標達成を前提とした行動であるが、競争を目標達成のための手段として志向する意識も競争心として表わされているのである。

この、別の目的のために“競争を利用する”場合の競争心を手段型競争心、従来の他者に勝ることが目標となる競争心を目標型競争心と呼ぶことにする。手段型競争心は SOQ の自己目標志向、PDCAS など測定が可能であるが、目標型競争心との相関が低いことから、競争心と他の尺度との比較を行なう際には、あまり重要視されていない。したがって、競争心研究の知見のほとんどは目標型競争心の知見であり、競争心の定義も目標型競争心の定義であるといえる。太田 (2001b) は、明確な競争相手として考えられるライバルの存在の影響について、肯定的側面と否定的側面の両面から検討している。肯定的側面での影響には、ライバルと競争することによる意欲面、行動面での促進があげられ、手段型の競争が行なわれていると考えられる。しかし、否定的側面では過剰な競争心による否定的な意識や行動の増加があげられており、過剰な競争心、すなわち目標型競争心による悪影響と考えられる。このように、競争心のとらえ方 (手段型・目標型) により、その影響の認知は異なってくる。

2. 今後の課題

前項であげたように、手段型競争心についてはあまり競争心研究の中でも取り上げられていない。目標型競争心については競争経験の多さと関係するのではないかとの指摘 (Gill, 1993; 関口, 2001) もあるように、競争的な状況に置かれることで個人の競争心は促進されることが考えられる。教育場面においても、競争的目標構造が支配的である (鎌原, 1986) 以上、生徒は外発的に競争を促進する状況にさらされていると言わざるを得ない。

その状況がもたらす効果について論じることは目標型競争心についての検討に他ならない。したがって“勝つ”ことだけでなく、競争を“利用する”ことや“楽しむ”こと (Epstein & Harackiewicz, 1992; Harackiewicz, Sansone, & Manderlink, 1985) や、“有効な競争方法を考える” (Deutsch, 1993) といった手段型競争心について検討することも必要であると考えられる。

また、実験場面で競争心を扱うとき、主に目標型競争心である「競争させる」状況が使用されるが、対等性を考慮すること (室山・堀野, 1990) や、相手からのフィードバックの与え方 (室山・堀野, 1991) を操作することによって、対人認知の非好意的な変化の抑制に効果があることが明らかとなっている。また、Cheng & Chan (1999) は、競争心と友情の深さには相関関係が無いことを示し、競争心が友情を深めるための触媒の効果を果たす可能性を指摘している。したがって、これまでの研究で示された、競争に対する否定的な知見を導かない競争状況の設定を目的とした検討を行なう必要があるであろう。さらに実験場面において、手段型競争心として自発的に「競争する」状況を設定した検討は行なわれていないため、手段型競争心における知見はまだ少ない。今後、手段型競争心を設定し、その状況を利用した手段型競争心の検討が望まれる。

【引用文献】

- 東江康治・石川清治・嘉数朝子 1984 協同・競争・個別学習方式に対する選好度の測定—学習選好尺度の作成— 琉球大学教育学部紀要第二部, 27, 11-20.
- Anderson, C.A., & Morrow, M. 1995 Competitive aggression without interaction: Effects of competitive versus cooperative instructions on aggressive behavior in video game. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1020-1030.
- Bruning, J.L., Sommer, D.K., & Jones, B.R. 1966 The motivational effects of cooperation and competition in the means-independent situation. *The Journal of Social Psychology*, 68, 269-274.
- Buss, A.H. 1986 *Social Behavior and Personality*. Hillsdale, New York: Erlbaum Associates.
- (大淵憲一 (監訳) 1991 対人行動とパーソナリティ 北大路書房)
- Cheng, S-T., & Chan, A.C.M. 1999 Sex, competitiveness, and intimacy in same-sex friendship in Hong Kong adolescents. *Psychological Reports*, 84, 45-48.
- Deci, E.L., Betley, G., Kahle, J., Abrams, L., & Porac, J. 1981 When trying to win: Competition and intrinsic motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 79-83.
- Deutsch, M. 1949a A theory of co-operation and competition. *Human Relations*, 2, 129-152.
- Deutsch, M. 1949b An experimental study of the effects of co-operation and competition upon group process. *Human Relations*, 2, 199-231.
- Deutsch, M. 1960 The effect of motivational orientation upon trust and suspicion. *Human Relations*, 13, 123-139.
- Deutsch, M. 1993 Educating for a peaceful world. *American Psychologist*, 48, 510-517.
- Epstein, J.A., & Harackiewicz, J.M. 1992 Winning is not enough: The effects of competition and achievement orientation on intrinsic interest. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 128-138.
- Fabian, L., & Ross, M. 1984 The development of the sports competition trait inventory. *Journal of Sport Behavior*, 7, 13-27.
- Finkenber, M.E., Moode, F.M., & Dinucci, J.M. 1998 Analysis of sport orientation of female collegiate athletes. *Perceptual and Motor Skills*, 86, 647-650.
- Fung, L. 1992 Participation motives in competitive sports: A cross-cultural comparison. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 9, 114-122.
- 古畑和孝 2000 競争心 詫摩武俊・鈴木乙史・清水弘司・松井豊 (編) 性格と対人関係 プレーン出版 Pp.251-267.
- Gill, D.L. 1988 Gender differences in competitive orientation and sport participation. *International Journal of Sport Psychology*, 19, 145-159.
- Gill, D.L. 1993 Competitiveness and competitive orientation in sport. In R. N. Singer, M. Milledge, & L. K. Tennant (Eds.) *Handbook of Research on Sport Psychology* New York: Macmillan, Pp.314-327.
- Gill, D.L., & Deeter, T.E. 1988 Development of

- the sport orientation questionnaire. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, **59**, 191-202.
- Gill, D.L., Dziewaltowski, D.A., & Deeter, T.E. 1988 The relationship of competitiveness and achievement orientation to participation in sport and nonsport activities. *The Sport and Exercise Psychology*, **10**, 139-150.
- Gill, D.L., Kelley, B.C., Martin, J.J., & Caruso, C.M. 1991 A comparison of competitive-orientation measures. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, **13**, 266-280.
- Gould, D., Feltz, D., & Weiss, M. 1985 Motives for participating in competitive youth swimming. *International Journal of Sport Psychology*, **16**, 126-140.
- Harackiewicz, J.M., Sansone, C., & Manderlink, G. 1985 Competence, achievement orientation, and intrinsic motivation: A process analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 493-508.
- 堀野緑 1987 達成動機の構成因子の分析－達成動機概念の再検討－ 教育心理学研究, **35**, 148-154.
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, **39**, 308-315.
- Houston, J.M., Carter, D., & Smitther, R.D. 1997 Competitiveness in elite professional athletes. *Perceptual and Motor Skills*, **84**, 1447-1454.
- Houston, J.M., Kinnie, J., Lupo, B., Terry, C., & Ho, S.S. 2000 Competitiveness and conflict behavior in simulation of a social dilemma *Psychological Reports*, **86**, 1219-1225.
- Huddleston, S., & Garvin, G.W. 1995 Self-evaluation compared to coaches' evaluation of athletes' competitive orientation. *Journal of Sport Behavior*, **18**, 209-214.
- Insko, C.A., Schopler, J., Gaertner, L., Wildschut, T., Kozar, R., Pinter, B., Finkel, E.J., Brazil, D.M., Cecil, C.L., & Montoya, M.R. 2001 Interindividual-intergroup discontinuity reduction through the anticipation of future interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 95-111.
- Jenkins, C.D.A. 1978 A comparative review of the interview and questionnaire methods in the assessment of the coronary-prone behavior pattern. In T.M. Dembroski, S.M. Weiss, J. L. Shields, S. Haynes, & M. Feinleib (Eds.), *Coronary-prone Behavior*. New York: Springer.
- Johnsen, K., Espnes, G.A., & Gillard, S. 1998 The association between Type A/B behavioural dimension and Type 2/4 personality patterns. *Personality and Individual Differences*, **25**, 937-945.
- 鎌原正彦 1986 高校生の LOCUS OF CONTROL に関する研究－期待および学習動機との関連－ 東京大学教育学部紀要, **26**, 107-117.
- Kelley, B.C., Hoffman, S.J., & Gill, D.L. 1990 The relationship between competitive orientation and religious orientation. *Journal of Sport Behavior*, **13**, 145-156.
- 久富善之 1993 競争の教育 旬報社
- Lakie, W.L. 1964 Expressed attitudes of various group of athletes toward athletic competition. *The Research Quarterly*, **35**, 497-503.
- Lasane, T.P., Howard, W.L., Czopp, A.M., Sweigard, P.N., Bennett, G.G., & Carvajal, F. 1999 Hypermasculinity and academic goal-setting: An exploratory study. *Psychological Reports*, **85**, 487-496.
- MaCallum, D.M., Harring, K., Gilmore, R., Drenan, S., Chase, J.P., Insko, C.A., & Thibaut, J. 1985 Competition and cooperation between groups and between individuals. *Journal of Experimental Social Psychology*, **21**, 301-320.
- Martens, R. 1975 *Social psychology and physical activity*. New York: Harper & Row.
- Martens, R. 1977 *Sport Competition Anxiety Test*. Champaign, IL: Human Kinetics.
- Martens, R., & Gill, D.L. 1976 State anxiety among successful and unsuccessful competitors who differ in competitive trait anxiety. *The Research Quarterly*, **47**, 698-708.
- Martens, R., & Simon, J.A. 1976 Comparison of three predictors of state anxiety in competitive situations. *The Research Quarterly*, **47**, 381-387.
- Martin, H.J., & Larsen, K.S. 1976 Measurement of competitive-cooperative attitudes. *Psychological Reports*, **39**, 303-306.

- Martin, J.J., & Gill, D.L. 1995 Competitive orientation, self-efficacy and goal importance in Filipino marathoners. *International Journal of Sport Psychology*, 26, 348-358.
- Matthews, K.A. 1980 Measurement of type A behavior in children: Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, 51, 466-475.
- Matthews, K.A., Krantz, D.S., Dembroski, T.M., & MacDougall, J.M. 1982 Unique and common variance in structured interview and Jenkins Activity Survey Measure of the Type A behavior pattern. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 303-313.
- McClelland, D.C., Atkinson, J. W., Clark, R.A., & Lowell, E.L. 1953 *The achievement motive*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- 南博 1957 体系社会心理学 光文社
- 室山晴美・堀野緑 1990 競争場面における対人認知および課題認知の変容 教育心理学研究, 38, 269-276.
- 室山晴美・堀野緑 1991 競争場面における敗北者の課題認知と対人認知-負け方と勝者からのフィードバックの効果 教育心理学研究, 39, 298-307.
- 室山晴美・弓削洋子 1990 日常の対人行動および生活意識と性格特性との関連 日本社会心理学会第31回発表論文集, 226-227.
- 中村陽吉 1983 対人場面の心理 東京大学出版会
- Nelson, J., Gelfand, D., & Hartmann, D. 1969 Children's aggression following competition and exposure to an aggressive model. *Child Development*, 40, 1085-1097.
- 太田伸幸 1999 学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 275-285.
- 太田伸幸 2000 学習におけるライバルの類型による差異の検討 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 670.
- 太田伸幸 2001a ライバルの有無に影響する要因の検討-競争に関する意識に注目して- 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 264.
- 太田伸幸 2001b ライバルの肯定的側面と否定的側面の検討 日本グループ・ダイナミクス学会第49回大会発表論文集, 78-79.
- Owens, L., & Straton, R.G. 1980 The development of a co-operative, competitive, and individualised learning preference scale for students. *British Journal of Educational Psychology*, 50, 147-161.
- Reeve, J., & Deci, E.L. 1996 Elements of the competitive situation that affect intrinsic motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 24-33.
- Reeve, J., Olson, B.C., & Cole, S.G. 1987 Intrinsic motivation in competition: The intervening role of four individual differences following objective competence information. *Journal of Research in Personality*, 21, 148-170.
- Ryckman, R.M., & Hamel, J. 1992 Female adolescents' motives related to involvement in organized team sports. *International Journal of Sport Psychology*, 23, 147-160.
- Ryckman, R.M., Hammer, M., Kaczor, L.M., & Gold, J.A. 1990 Construction of a hypercompetitive attitude scale. *Journal of Personality Assessment*, 55, 630-639.
- Ryckman, R.M., Hammer, M., Kaczor, L.M., & Gold, J.A. 1996 Construction of a personal development competitive attitude scale. *Journal of Personality Assessment*, 66, 374-385.
- Ryckman, R.M., Libby, C.R., van den Borne, B., Gold, J.A., & Linder, M.A. 1997 Values of hypercompetitive and personal development competitive individuals. *Journal of Personality Assessment*, 69, 271-283.
- Ryckman, R.M., Thornton, B., & Butler, J.C. 1994 Personality Correlates of the hypercompetitive attitude scale: Validity tests of Horney's theory of neurosis. *Journal of Personality Assessment*, 62, 84-94.
- Scanlan, T.K. 1988 Social evaluation and the competition process: A developmental perspective. In F.L. Smoll, R.A. Magill, & M.J. Ash (Eds.) *Children in sport* (3rd ed.) Pp.135-148.
- 関口洋美 1996 児童の学習場面における競争心尺度開発の試み 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 393.
- 関口洋美 1997 児童の学習場面における競争心と学習動機の関係 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 491.
- 関口洋美 1998 「一般的競争心尺度」開発の試み 日本教育心理学会第40回総会発表論文集, 286.

- 関口洋美 1999 一般的競争心尺度開発の試み(2) 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 528.
- 関口洋美 2001 競争心に関する研究－競争経験と競争心との関係－ 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 255.
- Sherif, M. 1966 *Group conflict and co-operation: Their social psychology*. London: Routledge & Kagan Paul.
- Smither, R. D., & Houston, J. M. 1992 The nature of competitiveness: The development and validation of the competitiveness index. *Educational and Psychological Measurement*, 52, 407-418.
- Spence, J.T., & Helmreich, R.L. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates and antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- Vallerand, R.J., Gauvin, L.I., & Halliwell, W.R. 1986a Effects of zero-sum competition on children's intrinsic motivation and perceived competence. *The Journal of Social Psychology*, 126, 465-472.
- Vallerand, R.J., Gauvin, L.I., & Halliwell, W.R. 1986b Negative effects of competition on children's intrinsic motivation. *The Journal of Social Psychology*, 126, 649-657.
- Vealey, R.S. 1986 Conceptualization of sport-confidence and competitive orientation: Preliminary investigation and instrument development. *Journal of Sport Psychology*, 8, 221-246.
- Vealey, R.S. 1988 Sport-confidence and competitive orientation: An addendum on scoring procedures and gender differences. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 10, 471-478.
- 山崎勝之 1989 Type A 行動の形成と親の養育態度 日本心理学会第53回大会発表論文集, 178.
- 山崎勝之・菊野春雄 1990 日本語版幼児用 Type A 検査(MYTH)の作成 心理学研究, 61, 155-161.
- 谷島弘仁・新井邦二郎 1994 学習の目標志向の発達の検討および学業達成との関連 筑波大学心理学研究, 16, 163-173.
- 弓削洋子・室山晴美 1990 Buss(1986)による Personality Scale の信頼性・妥当性の検討－Aggressiveness, Competitiveness 及び Perspective Taking に関して－ 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 224-225.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

A review of competitiveness
: A discussion on the measurements of competitiveness.

Nobuyuki OTA

The concept of competition, which is one of the interpersonal relationship through goal achievement, has been mainly examined in the experimental study. In the experimental situation, the effects of objective competitive situation were measured, but the effects of subjective competitive situation were not. Accordingly, the purpose of this paper was a review of the competitiveness in order to reconsider the concept of competitiveness. On personality assessment, the competitiveness has been measured as a multi-dimensional construct. In the field of sports psychology, goal for competition has been mainly measured. Both domains have interpreted that competitiveness is the orientation for goal achievement in common. In the discussion, the concept of the competitiveness was divided into 2 types. One was “competitiveness for goal” which aimed at winning the competition itself, and the other was “competitiveness for means” which competed for achieving another goals (e.g. “to development oneself”, “to understand each other”). Since the past studies on competitiveness had measured “competitiveness for goal”, it must be required to focus on “competitiveness for means” in the future study.

Key words: competitiveness, competition, measurement, competitiveness for goal, competitiveness for means

Appendix A
Competitive Orientation Inventory (Vealey, 1986)

When you compete in sport, you focus two major goals. These goals are:

1. To perform well
2. To win

Think about how satisfied you are when you perform well and lose.

Think about how satisfied you are when you perform poorly and win.

Below is a matrix containing 16 boxes. Each box represents a situation in which you either win or lose and either perform well or poorly.

Write a number from 0 to 10 in each box below

(see the example box on the right).

8	6	10	2
3	7	4	8
9	5	0	7
6	2	7	1

Select your numbers for each box based on the scale below:

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

very dissatisfied
in this situation

very satisfied
in this situation

* There are no right or wrong answers—we are interested in how *you* feel.

	easy win	close win	close loss	big (easy win for loss opponent)	
very good performance					very good performance
above average performance					above average performance
below average performance					below average performance
very poor performance					very poor performance
	easy win	close win	close loss	big (easy win for loss opponent)	